

Title	「作文2」授業報告
Sub Title	
Author	村上, 絢乃(Murakami, Ayano)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2018
Jtitle	日本語と日本語教育 No.46 (2018. 3) ,p.99- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20180300-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「作文 2」授業報告

村 上 絢 乃

1. はじめに

本稿では、日本語・日本文化教育センターに設置されている「技能別科目」のうち、筆者が担当している「作文 2」について報告する。

2. 作文 2

「作文 2」は初級レベルの科目であり、2 レベルの学習者を対象としている。以下に授業の概要を述べる。

2-1. シラバス

授業は週 1 回 1 コマ (90 分) で、全 15 週である。筆者は 2015 年春学期から「作文 2」を担当しているが、シラバスは基本的に同じものを使用している。表 1 は 2017 年秋学期のシラバスである。

表 1 2017 年度秋学期「作文 2」シラバス

Objectives	The purpose of this course is to enable students to master writing skills at an elementary level. Students will write simple paragraphs using elementary kanji, vocabulary, and grammar.
Contents	The course is designed for students to enhance their writing skills based on sentence structures and grammatical patterns learned in <i>Minna no Nihongo Shokyuu I</i> (L14-L25) .
Textbooks	<i>Minna no Nihongo Shokyuu I 2nd Edition Kaite Oboeru Bunkei Renshuuchoo</i> (3A Corporation)
Assessment	Attendance, class participation, small tests, homework, and examinations.

このクラスの到達目標は、初級レベルの文章能力を身に付け、初級の文型・語彙・漢字を用いて、平易な内容を文章で表せるようにすることであ

る。具体的には、このクラスの学習範囲である『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』第14課から第25課の文型を用いて、文が書けるようになることを目標とした。

教材は指定教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 書いて覚える文型練習帳第2版』と自作教材を使用した。

成績は出席、授業態度、小テスト、宿題、中間試験、期末試験で評価をした。

2-2. 授業の進め方

授業は1回に1課のペースで進めた。文型を使った文を書くことを主な活動とし、基本的に①新出語彙・文型の確認、②教科書と自作プリントを使って文を書く練習、③一まとまりの短い作文を書くという流れで行った。表2に2017年秋学期の授業予定を示す。

多くの学生が文法のクラスを履修していたため、①では復習として簡単に語彙・文型を確認し、口頭練習を行った。特に14課以降に導入される「て形」「ない形」などの活用形は、口頭では正しく言うことができていても、正確に書けない学生が多かったため、口頭だけでなく、書いて確認する時間も設け、十分に練習を行うようにした。

②では、書き換え問題や助詞を補って文を完成させる問題などから始め、前件・後件作文、既習文型と組み合わせて文を書く練習を行った。文を書いたら発表し、教師が板書しながら語彙・文型の使い方や注意点などを確認した。

文型ごとに①②の流れで進め、③で一まとまりの短い作文を書く練習を行った。まず、5行から10行程度のモデル作文を提示し、読み合わせ、内容確認を行った後、作文を書いた。これは毎週ではなく、2、3課に1回のペースで行った。添削後、間違いが多い場合には清書を次週までの宿題とした。

表2 2017年秋学期「作文2」授業予定

回	授業内容	学習項目
1	個別学習指導期間	
2	ガイダンス レベルチェックテスト	
3	L1-L3 復習	
4	L14	「V てください」「V ています」
5	L15	「V でもいいですか」「V てはいけません」 「V ています」
6	L16	「V て、V て、～」「V てから、～」 「N1 は N2 が～」「い A くて、～」「な A・N で～」
7	L17	「V ないでください」「V なければなりません」 「V なくてもいいです」
8	L18	「V ことができます」「趣味は V ことです」 「～まえに、～」
9	L19、中間試験	「V たことがあります」「V たり、V たりします」 「い A くなります」「な A・N になります」
10	L20	普通形
11	L21	「〈普通形〉と思います」「〈普通形〉と言います」
12	L22	連体修飾
13	L23	「～とき、～」「V と、～」
14	L24	「N をくれます」 「V てあげます」「V てもらいます」「V てくれます」
15	L25、期末試験	「～たら、～」「～ても、～」

2-3. 履修者とレベルチェックテスト

技能別科目では、自由聴講期間にレベルチェックテストが行われる。履修希望者は、レベルチェックテストを受験しなければならず、テストの結果が「合格」または「警告」の場合に履修登録が可能となっている。

「作文2」の学習範囲は『みんなの日本語初級 I 本冊』の第14課から第25課である。このクラスを履修するために必要な最低限の知識・能力が

あるかを測るため、レベルチェックテストには第1課から第13課の内容から、①助詞、②形容詞の活用、③Q & Aの問題を出題した。

合否判定の基準は、正答率が8割以上を「合格」、7割以上を「警告」とした。表3は各学期の「レベルチェックテストの受験者数」とその結果の内訳である。()に最終的な履修者の数を示す。

表3 「作文2」レベルチェックテストの受験者数とその結果の内訳

	2015 年 春学期	2015 年 秋学期	2016 年 春学期	2016 年 秋学期	2017 年 春学期	2017 年 秋学期
受験者数	8 (4)	20 (11)	24 (12)	15 (7)	11 (8)	16 (10)
合格	4 (4)	10 (4)	12 (5)	14 (7)	7 (5)	10 (7)
警告	0	7 (7)	9 (7)	0	4 (3)	3 (3)
不合格	0	3	3	1	0	3

注：()は履修者数

2016年春学期までは聴講生も履修可能であったが、2016年秋学期以降は別科の正科生のみが履修可能となった。そのため、2016年度秋学期以降は受験者数が減っているが、履修者数は2015年春学期を除いて、各学期10名前後のクラス編成となっている。

各学期の不合格者は、そのほとんどが1レベルの学生であった。このレベル判定は正科生と聴講生で判定方法が異なる。正科生のレベルは教員によって判定されるが、聴講生のレベルは学生がWebからテストをダウンロードし、自己採点をして判定したものである。2レベル以上で不合格になった者の多くが聴講生であったが、このレベル判定は自己採点結果によるものなので、実際には1レベルに近かった可能性もある。このことから、レベルチェックテストを行うことにより、さらに履修者のレベルを測ることができたと考える。

最終的に科目を登録した履修者の数を見ると、2015年春学期と2016年度秋学期を除き、「警告」の学生もある程度含まれていることが分かる。「警

告」の学生には、授業についていくことが難しいと考えられるため、履修するかどうか慎重に検討するよう促したが、結果的にはほとんどの学生が登録を行っている。

また、各学期の履修者全体に占める「合格」と「警告」の学生の割合を見ると、2016 年春学期までは「警告」の学生が多いが、2016 年秋学期以降は「合格」の学生が多くなっていることが分かる。これは受験者のレベルが影響していると考えられる。先にも述べたように、聴講生と正科生とでは、レベルの判定方法が異なる。そこで、次は正科生のみを取り出し、各学期の履修者数とレベルの内訳をまとめた。表 4 にその結果を示す。

表 4 正科生の履修者数とそのレベルの内訳

	2015 年 春学期	2015 年 秋学期	2016 年 春学期	2016 年 秋学期	2017 年 春学期	2017 年 秋学期
履修者数	3	5	7	7	8	10
1 レベル			2			
2 レベル	3	4	1	5	2	4
3 レベル		1	3	2	6	5
4 レベル						1
5 レベル			1			

これを見ると、2017 年春学期以降は 3 レベル以上の学生の割合が高くなっていることが分かる。各学生のテスト結果を見ても合格者のほとんどが 3 レベル以上の学生であった。そのため、履修者のうち、合格者が占める割合が高くなっていると考えられる。

では、なぜ 3 レベル以上の学生が多くなったのか。その理由として、「作文 2」を復習のために履修する学生が増えたことが挙げられる。3 レベル以上の学生にこの科目を登録した理由を聞いたところ、別科が行うプレイスメントテストの結果は 3 レベル以上であったが、初級前半の助詞や形容詞の定着が不十分であるため、復習のために登録したとのことだった。確

かにレベルチェックテストの結果を見ると、そのような学生は助詞や形容詞を問う設問の正答率が低かった。

以上のように、レベルチェックテストの実施方法は基本的に変わらないが、2016 年秋以降、科目の対象者が正科生に限られたことにより、履修者の傾向が変わった。また、その結果クラス運営の状況も大きく変化した。

3. 授業報告

先にも述べたように、各学期 10 名前後のクラス編成ではあるが、2016 年度を境にして履修対象者が変わったため、クラス運営の状況も異なる。そこで、以下では履修者が正科生のみとなった 2016 年秋学期以降の授業について報告する。

3-1. 2016 年秋学期

履修者は 7 名 (2 レベル 5 名、3 レベル 2 名) で全体的にレベルが揃っていた。また、全員がレベルチェックテストに合格しており、文法のクラスも履修していた。そのため、語彙や文型の確認がスムーズに進み、文を書く練習に時間をかけることができた。

2 レベルの学生のうち 1 名は中級レベルの学習歴があったため、3 レベル以上の文法や語彙を使うこともあった。しかし、助詞や活用形などの基本的な部分の間違ひが多く、正確さに欠けており、その点は最後まで改善されなかった。

その他の学生は、2 レベルの語彙や文型を使って丁寧に積み上げていた。学期の前半は助詞や活用形の誤りも多かったが、徐々に定着し、後半にはほとんど誤りが見られず、到達目標が達成できた。

以上のように、全体的にレベルが揃っていたことにより、基本的な練習を十分に行うことができた。一方、応用練習はあまり行えなかった。文型の復習に時間がかからなかったことを考えると、応用練習の配分を多くすることもできたのではないかと思われる。この点が反省点として挙げら

れ、次回の課題となった。

3-2. 2017 年春学期

履修者は 8 名（2 レベル 2 名、3 レベル 6 名）であった。3 レベルの学生が半数以上を占めていたが、全体的に 1、2 レベルの助詞や形容詞の活用が正しく定着しておらず、復習が必要であった。また、書くスピードも 2 レベルの学生とあまり差がなかった。一方、2 レベルの学生はレベルチェックテストの結果に特に問題がなかったため、全員で基本的な練習を進める予定であった。

しかし、2 レベルの学生のうち 1 名は、レベルチェックテストには合格していたが、授業開始後に平仮名や片仮名の定着が不十分であることが分かった。授業中の活動には真面目に取り組み、出席率も悪くなかったが、表記も文法もなかなか定着せず、中間試験、期末試験ともに不合格だった。

また、3 レベルの学生のうち 5 名が「総合日本語 4」を受講していたこともあり、徐々に 2 レベルと 3 レベルの差が開き、授業運営に影響してきた。「総合日本語 4」は 1 学期間に 3、4 レベルの学習範囲を終える進度の速いクラスである。そのため、3 レベルの学生は 2 レベルの学生よりも文型の定着が進み、書くスピードも速くなった。その結果、特に中間試験以降はクラス全員が同じペースで練習を進めることが難しくなった。

2 レベルの学生を中心に授業を進めるよう心掛けたが、上のレベルの学生は練習が早く終わり、物足りない様子だった。応用練習を用意するなど工夫したが進度調整が難しく、授業のベース配分、応用練習の見直しが以後の課題となった。

3-3. 2017 年秋学期

2017 年秋学期は履修者 10 名（2 レベル 3 名、3 レベル 6 名、4 レベル 1 名）であった。3 レベル以上の学生が多く、2 レベルは 3 名中 2 名が「警告」であったため、レベル差による影響が心配だった。しかし、3、4 レベ

ルの学生は復習目的で履修しており、特に初めのうちは口頭練習にも慣れておらず、全体的に授業進度に影響するほどのレベル差は見られなかった。

この学期の学生も半数が「総合日本語4」の履修者であったため、やはり中間試験以降は書くスピードが速くなった。しかし、2レベルの学生も丁寧に積み上げ、文型を組み合わせた長い文が書けるようになってきており、前学期程の差は見られなかった。このような状況だったため、短い作文を書くなどの応用練習にも時間がかけられるようになった。その結果、全員が目標を達成できたが、3、4レベルの学生の中には、最後まで活用形が不正確な学生がいた。やはり既習であるため、練習が簡単に感じられるようで、丁寧に欠ける傾向にあった。この点で、既習の学生に対する練習方法の改善が課題となった。

4. まとめ

「作文2」では初級レベルの文章能力、特に2レベルで学習した文型を使って文を書くことを到達目標としている。特に、2016年秋学期以降は履修者が全員正科生になり、同じ基準でレベルが判定されていること、全員が文法の科目を履修していることなどの状況が整ったこともあり、語彙・文型の確認にかかる時間が減り、書く練習に時間がかけられるようになった。基本的な練習が十分に行えるようになった結果、各学期ともほとんどの学生が到達目標を達成することができた。この科目は2レベルが対象であるため、今後も2レベルの語彙・文型を丁寧に積み上げ、文法のクラスで学習したことを復習しながら運用能力が身につけられるよう指導したいと考えている。

また、今後の課題としては、応用練習の工夫、既習者に対する練習方法の改善が挙げられる。基本的な練習を十分に行うことが前提であるが、そのような練習が続くとモチベーションを保つことが難しくなる。これまで

に「作文2」を履修した3レベル以上の学生は、復習が必要であることを自覚しており、基本的な内容でも熱心に取り組む学生が多かった。しかし、授業が進むにつれて、やはり簡単に感じられる部分が多くなり、モチベーションが保てず集中できない様子も見られた。そこで、初級の文型を復習しつつ達成感が得られる練習をどのように行うかという点を今後の課題としたい。

使用教科書

『みんなの日本語初級Ⅰ本冊 第2版』（2012）スリーエーネットワーク編著、スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅰ書いて覚える文型練習帳 第2版』（2012）平井悦子・三輪さち子著、スリーエーネットワーク